

Ⅲ

成果と課題、 今後の展望



成果と課題、今後の展望

事業実施により得られた成果・効果

①社会教育、障がい福祉、特別支援教育関係者の連携体制の強化

→例) ○「青少年の家ワンデイキャンプ」実施において、市町村の障がい福祉所管課、自立支援協議会と協議し、事業所に周知

○「特別支援学校出前講座」の講師選定やプログラム実施について、県身体障害者福祉センターと協働

○「特別支援学校出前講座」に市町村の障がい福祉所管課や自立支援協議会等が参加し、それぞれの取組を紹介

②大学や社会教育関係施設（公民館、青少年の家）、特別支援学校における講座数・受講者数の増加及び講座内容の発展

		令和4年度	令和5年度	令和6年度	増 減 (R4⇒R6)
大分大学生涯学習講座	回 数	6	5	4	-2
	受講者数	4	13	10	+6
青 少 年 の 家 ワンデイキャンプ	回 数	4	8	7	+3
	参加者数	111	190	109	-2
モデル公民館・図書館	実施自治体数	1	3	6	+5
	回 数	5	14	31	+26
	参加者数	38	154	340	+302
特別支援学校出前講座	実施校数	3	5	7	+5
	参加者数	41	111	151	+110

○大分大学生涯学習講座⇒大学ならではの教育的リソースを提供（環境、講師、学生ボランティア）
学外の機関とも連携し、地域での体験活動も実施した。

○青少年の家ワンデイキャンプ⇒青少年の家ならではの体験型プログラムを実施
プログラムを選択制（散策or創作活動）にすることで、受講者の意思を尊重することができた。

○モデル公民館・図書館⇒自立支援協議会や保護者会などと連携し、綿密に企画・準備
既存のプログラムにとらわれず、新しい学び（モルック等）やニーズに応じた学びを模索し、講座後の「生きる力」の育成や地域社会での自立・共生も見据えた内容にした。

○特別支援学校出前講座⇒市町村の教育委員会や公民館、障がい福祉所管課と連携し、地元の「学びの場」紹介
「ドローンサッカー」や「絵手紙」など、生徒の興味関心に応じた選択制にすることで、生涯学習の楽しさを伝えることができた。

③専用情報サイト「かたろうえ大分」のユニバーサル化と動画教材制作による、学びへのアクセス保障と新たな学びの形を提供

○音声読み上げ、ふりがな、問合せ機能と動画教材追加、情報提供先増加等による、閲覧者数の増加（アクセス数は前年比62%増）

④社会教育と福祉の連携を通じた地域人材の発掘と活用による、「障がい者の生涯学習」への理解者・協力者の増加

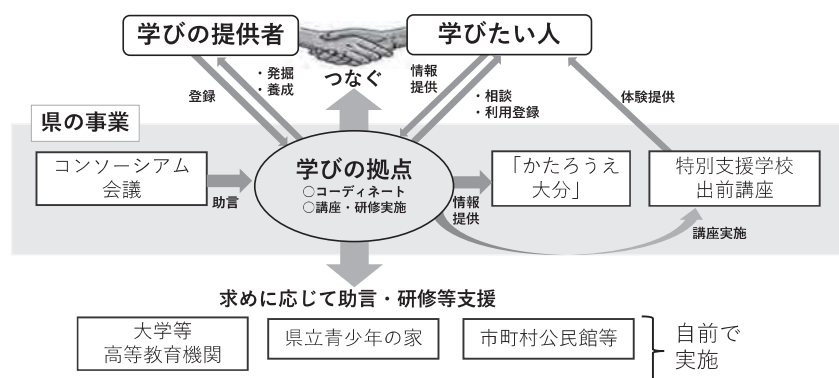
⑤学び・交流の拠点「おおいたユニバーサルカレッジ」を開講

課題

- 取組を実施する施設数や講座数は順調に拡大してきたと言えるものの、参加者や支援者（ボランティア）の確保に苦労している実態がある。人が集まらない理由について、講座内容の妥当性（来たいと思える内容になっているか）やアクセス面、費用面の負担等も加味しながら、当事者や保護者の意見を聞いて分析する必要がある。支援者については、「共に楽しみ・学ぶ」というスタンスを持ちつつ、必要に応じて支援するという姿勢が必要であり、研修等で啓発していく必要がある。
- まだ全県的な取組の広がりには至っていない（P58県地図参照）。地域における社会教育の拠点は公民館であり、公民館で地域の方々と触れ合うことは、災害時に安心して公民館避難できること、ひいては「命を守ること」につながるということを社会教育関係者は自覚し、通常の公民館講座に障がいがある方を受け入れる等、既存の取組を活用して講座や研修を実施してみることが求められる。
- 専用ウェブサイト「かたろうえ大分」の認知度がまだ低い。あらゆる社会教育関係のイベントや研修において周知するだけにとどまらず、生徒が持っている端末にブックマークを登録してもらう等、より積極的な周知活動が必要である。

今後の展望

<イメージ図>



*県の運営する「学びの拠点」が「学びの提供者」と「学びたい人」をつなぐ「ハブ」＝「ワンストップ相談施設」としての機能を持つ。

*「コンソーシアム」及びウェブサイト「かたろうえ大分」、「特別支援学校出前講座」と有機的に連動しながら取組を推進する。

*市町村や大学等は自前で取組を実施し、求めに応じて県は助言等の支援を行う。